旅するトゥーサン——訳者あとがき

本書は Jean-Philippe Toussaint, *Autoportrait (à l'étranger)*, Les Éditions de Minuit, 2000の全訳である。

世に認知された作家であれば誰しも、連載を抱え、日々締め切りに追われ、小説にエッセイにその他雑文にと、注文に応じ忙しく原稿を書き分けている。少なくともそれが日本の人気作家についてわれわれが持つイメージである。

だがジャン＝フィリップ・トゥーサンのライフ・スタイルはまったく異なる。そもそも日本流文芸誌が存在せず、単行本で勝負するしかないフランスの場合、

一冊一冊の書物に精魂を傾けることが小説家の任務のすべてである。しかもトゥーサンは多くの作家と異なり、他に定職を持っていない。映画の準備に追われているとき以外はすべての時間が自分のものだ。版元であるミニュイ社は彼にいかなる締め切りも課さない。要するに気が向けば書き、気が向かなければ書かない。まったき自由の中から一冊の本とするに足る成果が得られたとき、彼は原稿をミニュイ社に送る。そうした優雅にして過酷、ある意味ではもっとも純粋な条件の下で彼の作品は生み出されてきた。本書『セルフポートレート』はその彼の、日本でのみ刊行されたシナリオ『アイスリンク』をのぞけば通算六冊目の作品ということになる。

『浴室』から『テレビジョン』に到るこれまでの作品と本書のあいだには、明らかな違いがある。過去五作では原書の表紙にいずれも「小説（ロマン）」と記されていたのに対し、本書にはその表記がない。すなわちこれは、作家生活十五年目に

してトゥーサンが初めて出したエッセイ集、ないしは散文集ということになる。一読すればわかるとおり、内容は彼が世界各地に旅をした経験を綴ったものである。

その成り立ちからして本書は他の作品と一線を画す。ここに収められた文章中もっとも古いテクストは「東京、第一印象」だが、これはそもそも日本の文芸誌「すばる」の求めに応じて執筆されたテクストである。最後に記されているとおり、「東京」、「京都」の章ともども、「日本印象記」として同誌に掲載された文章がもとになっている。数年前訳者によるインタビューに答えて、トゥーサンは、注文を受けて書くのは自分としては稀なことだけれども、意外な刺激を受けたと述べていた。

「今はこの『印象記』という形式にとても興味がある。旅行記、旅日記というのは非常に古典的な形式なわけですが、きっとそこにぼくなりの特徴を出すこ

とができるんじゃないかと思うのです。つまりこれまで書いてきた本にも共通する、ごくささやかな細部、教訓とか理論的に大げさなものをまったく含まない小さな物を通して、街を眺め、時の経過を書くといったやり方ですが。そんな印象記を集めて、最後には日本に関する本ができあがったらいいと思っています」（「週刊読書人」一九九六年十二月六日号）

結局できあがったのは、全体が日本に関する本というわけではなかった。しかし日本の文芸誌による依頼が出発点となったことからしても、東京で始まり京都で終わる構成に鑑みても、これは明らかに、トゥーサンと日本とのあいだの特別な、親密な絆ゆえに可能になった書物であると言えるだろう。

そしてもちろん、ここにはデビュー以来旅を重ね、異国での滞在を重ねてきたトゥーサン自身の体験が活かされている。トゥーサンは招待を受け、あるいは奨学金を得て毎年のように――「しなやかな旅行カバン」一つで――旅立ち、

京都・九条山に四カ月、ベルリンに二年といった具合に長期滞在も体験している。この本で触れられている以外にも、彼はニューヨークに二度、シカゴに一度出かけているし、韓国、イタリア、北欧三国、デンマーク、オランダ、スペイン、モロッコにも旅している。贅沢な体験を凝縮した書物なのである。

その内容はおよそ一般の旅行記とは異なった、トゥーサンならではの不思議なおかしさにあふれている。「東京に着くのもバスチアに着くのも同じこと」という冒頭の一行から、異国趣味へのもたれかかりはあっさりと振り捨てられ、世界のどこに降り立とうが飄々とした物腰を少しも変えない作家のマイペースぶりが明らかになる。プラハ編では出し抜けに「プラハについては、何も言わずにおこう」と宣言し、「奈良、日本の古都」と題しながら神社仏閣をいささかも描かず（そのかわりにとんでもない光景を詳述し）、チュニジアの古代遺跡をやりすごす。訪れた土地に関する説明的記述を省略し、ツーリスト的関心

とは無縁の、別の印象記をめざそうとする姿勢が随所で示される。ベルリン編はその好個の見本である。街の描写、歴史や文化や社会についての言及などは皆無。舞台となるのは一軒の食料品店、登場人物は女店員と、そして作家のみ。切り詰められた設定のもと、緊張感みなぎるお笑いの一幕が繰り広げられる。

意地悪で太っちょの店員が切ったアスピックの一切れがあまりに薄く、「パスポートのビニールカバーか、メガネ拭きに使えそうなくらい」と作家は慨嘆する。そのあたりから文章は明らかに現実離れした誇張を示し、フィクションとしての面白さが濃厚にたちこめる。ユーモアがいわばトゥーサンに「離陸」を許し、事実に即した記述を「創作」の方へと、意外な大胆さで転換させていくかのようだ。トゥーサン本人の話に照らしてみると、本書に描かれたできごとはたいてい、多かれ少なかれ実際に起こった事柄であるようだ。東京でコルシカ人の友だちに出迎えられたのも、ささやかな（ほろ苦い？）板前修業を経

験したのも、ペタンク大会での優勝や、さらにはジェーン・バーキンの何とも予想外の登場も、すべて本当の話だという。しかしながら問題はまさしくその素材を扱う料理人の包丁さばきである。刺し身作りには無残に失敗しながらも、自己の体験を周囲の人間および自分自身に対する諧謔（かいぎゃく）にあふれた文章で物語に仕立てるトゥーサンの腕前は、すでに名人芸の域に達している。そして文章の運びに作者自身いくぶん煽られるようにして、実際の出来事には彩りが加えられ、架空のオチが盛りつけられたりもしているらしい。いずれの文章においても、思いがけない珍妙なる展開が仕組まれていて、読者の微苦笑、さらには哄笑（こうしょう）を誘う。刊行当時、「リベラシオン」「ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール」「レ・ザンロキュプティーブル」といったフランスの有力新聞・雑誌は、小さな本書を大きく取り上げて紹介したが、そこで何よりもまず称えられていたのもこれが大いに笑える本であるということだった。「すぐに読めて、しか

も読んでいるうちにどんどん気分が良くなってくる本」という評（「リベラシオン」紙アントワーヌ・ド・ゴドマール）は本書の魅力をよく言い当てている。

しかも「珍妙でとりとめのない放浪の精神（ノマディスム）」（「フィガロ」紙パトリック・グランヴィルの評）を発揮しながら、読み進めるうちに書物としての不思議な統一性が感じられてくるのもまた面白いところだ。たとえば随所に差すコルシカの影。旅するベルギー人作家の妻、マドレーヌは、コルシカ出身である。マドレーヌの両親はコルシカに健在で、トゥーサン一家は毎年夏を島で過ごす。東京にコルシカ人が、コルシカに日本人が登場するなりゆきが示すとおり、トゥーサンにとって日本とコルシカはなぜか相性がいい。その双方を行き来する神出鬼没のコルシカ人クリスチャン・ピエトラントーニ氏は本書の名物男と言うべき存在と化す。

ピエトラントーニ氏を始め、ジェーン・バーキンや、あるいはかつての同級

生に瓜二つの教授に到るまで、思いがけないところに思いがけない人物が出現し、一見冷静な作家を動揺させる。旅は笑いのみならず、むろん驚きにも満ちている。それはドイツ語、日本語、スペイン語、ヴェトナム語、そしてコルシカ方言と、さまざまな国の言葉の響きに耳を傾け、意味のわからない文字と親しく触れ合う体験でもある——座布団の上に座った作家の脚がついにはひらがなやカタカナを描き出す光景は、腰痛持ちとはいえ異国の環境に無理なく溶け込んでいく、彼の身体の柔軟さを示すエピソードとしても読むことができる。そしてまた、異国の人たちとの交流は滑稽な行き違いを含みながらも、意外な真実を旅人の前に差し出しもする。彼の愛読者だという日本人女性は、もっと小柄で、知的で、「青い人」かと思っていたと述べて作家をひどく狼狽させる。しかし同時にトゥーサンの作品が西洋式医学ならぬ「漢方」の効用を持つという彼女の感想は、自らの仕事に関する見事な定義付けを作家に与えてくれたの

である。

さらに作家は、巻頭で言及されていたとおり、性および死の領域をもかすめることになる。後者に関しては、チュニジアのスファクス行きをめぐる話が不思議な展開を見せる。その地名が「セックス」にも通じるどこか危険な響きを伴って耳を打ったのか、ともかく作家の胸にとりついたとんでもない予感と、予感を裏切る物語後半の運びとの、いかにも人を食ったノンシャランな掛け違い方にトゥーサンの本領がある。そしてまた最後を締めくくる「京都に戻る」における、一転してメランコリックな省察にもまた、実は作家トゥーサンの大切な資質が表れているのだ。

「今までは、時間に押し流されていくというこの感覚は書くことによって常に軽減されてきたのだった——書くこととは、いわばぼくを運び去る流れにあらがうための一つの方法、時の中に自分自身を刻み込み、その流れの非物質性の

うちに目印をつけ、切り口を、ひっかき傷をつけるための一つのやり方だったのだから」

この幕切れの文章は、書くという営みがトゥーサンにとって持つ意義を明かすと同時に、その意義が揺らぐ瞬間をも定着させた、貴重な一文と言えるだろう。二年ぶりに訪れた京都の街。雨の鴨川をしばし眺めたのち歩き出した旅人は、かつてよく使った路面電車の駅が廃駅となった事実を発見し衝撃を受ける。時間のもたらす破壊をあからさまに示す光景を目の当たりにして、自らの根拠が瞬時、激しく問い直されるのである。ここに到って読者は、本書の題名が『セルフポートレート』となっていることの正当性を知るだろう。さまざまな場所でのエピソードを積み重ねながら、くっきり浮かび上がってくるのは他ならない作家自身の肖像なのであり、「時の中に自分自身を刻み込む」試みこそが本書をもっとも根底から支えるものだったのである。それもまた「ひっかき

傷」を残すのみの、はかない抵抗にすぎないのかもしれないと最後にトゥーサンは匂わせている。しかし同時に、「非物質性」の流れの中に何かが刻まれたこともまた確かなのである。この薄い、小さな書物が与えるコンパクトでかつ濃密な手応えがその事実をあかし立てているはずだ。

☆

本書の翻訳作業を、訳者はまったく例外的と言うべき恵まれた条件のもとに進めることができた。以下に蛇足ではあるがそのことについて触れさせていただく。

ベルギーに「ヨーロッパ文芸翻訳家コレージュ」という施設があって、そこに二〇〇〇年夏、ぼくの本の訳者たちを招待しようという企画があるんだ。つ

いてはぜひきみにも来てほしい。そんな話をトゥーサンがしてくれたのは、九九年の冬彼が東京に来たときだったろうか。ありがたく快諾したものの、翻訳家たちが集まっていったい何をするのか、明確なイメージがそのとき頭に浮かんだわけではなかった。とにかく宿泊も食事もただ、滞在中に翻訳の仕事をすれば日当まで出るというトゥーサンの説明に惹かれるがまま、参加申し込みの手続きを取ったのだった。

トゥーサンが強調していたのは、その場所がスネフ城というお城の一郭で、実に快適な環境を提供しているということ、そして期間中は専属のシェフが腕をふるってくれるので、料理の質には期待していいということだった。さて実際に出かけてみて、たちまちのうちに理解できたのは、そこが翻訳家にとってこれ以上は望めない夢の空間であるという事実だった。

ブリュッセルから列車で三十分、さらにバスで十五分。牛や馬のいる牧場の

横を歩いていくと忽然と出現する文字どおり白亜の城がスネフ城である。かつて城の厩として用いられていたスペースを改造した、白塗りの壁の美しい個室。清潔なバス、トイレつき。共同食堂の冷蔵庫にはベルギーのビールが並び（これは有料）、コーヒー、紅茶は飲み放題。図書館にはパソコンが備えつけられ、ベルギー文学の本がずらりと揃っている。朝は好きな時間に起き出して、食堂でめいめい勝手にパンやヨーグルトにありつく。昼は庭のパラソルの下で猫たちを眺めながらサラダ主体のビュッフェ。そして夜は六時ころから三々五々ビールを飲み始め、やがてアペリティフのキールが出て、そしてディナー。自他ともに認める「料理の詩人」クロードの凝りに凝った、しかも重くなく食べやすい食事が供され、ワインの栓が抜かれ、やがてコニャックやアルマニャックのビンを持ち出す者も現れて、いつしか真夜中の酒宴に移行している……。

ラブレーの描いた理想の僧院のモットーをもじって、「汝の欲するところを

なせ（そして訳せ）！」というのが、この翻訳家コレージュの銘なのである。ベルギー文学に関する翻訳を出版社と契約しており、その仕事を持ってきていることが受け入れの基本条件なのだが、しかしその仕事ぶりをいちいちチェックされたりはしない。自由に、好きなように滞在を楽しみ、自然に親しみ——城の広大なフランス庭園には野ウサギが走っている——、適当に仕事をすればいい。しかも毎晩のようにベルギーの現役作家・詩人たちが招かれて肩の凝らない講演をしたり、自作を朗読したりし、その後一緒に食卓を囲み酒を酌み交わしておしゃべりに花を咲かせるのである。

そんなゆとりある、そして知的刺激に満ちたコレージュの創立者は、エルンスト・ブロッホの大著『希望の原理』仏訳でヨーロッパ翻訳賞に輝いた翻訳家にして、ベルギー翻訳家高等学院教授のフランソワーズ・ヴュイルマール女史。創立以来の館長である彼女は、参加者が到着すれば深夜でも車で迎えに出、み

んなの写真を撮っては各自に配り、講演の企画立案、司会進行をし、酒盛り用の酒をさし入れ、猫の面倒まで見るといった獅子奮迅の働きぶりであり――実際、獅子のごとき立派なブロンドの髪をなびかせたマダムである――、しかも完全なるボランティア、何の報酬ももらっていないというのだから絶句するほかない。

施設自体はベルギー・フランス語共同体文化プロモーション事業の一環として運営されているので、招待されるには先に触れたようにベルギー出身作家の翻訳に携わっていることが必要となる。この夏はベルギー文学のアンソロジーを編纂中の中国人研究者、同様の企画を推進中のヴェトナム人研究者、ジャクリーヌ・アルプマンの小説を翻訳中のラトビア人翻訳家等々、十二カ国からの〆二十人近くが招待を受けて滞在した。そしてそのうち十人が「トゥーサン組」だったのである。

トゥーサン組はアジアから中国と日本。あとはカナダ、チェコ、オランダ、ドイツ、ブルガリアからの参加だった。そしてトゥーサン自身も翻訳家と共に二週間泊まり込んだ。早々に判明した事実、それはチームのほぼ全員が、目下トゥーサンの最新作である本書を翻訳中であるということだった。そこでさっそく毎日昼、各自が疑問点を持って集まり、トゥーサンを囲んでやいのやいの議論し合うことになった。ドイツ語や英語は日本語よりはるかにフランス語に近そうだけれども、意外に日本人や中国人の訳者と同じ疑問、難問に悩んでいることがわかって、それだけに翻訳者間の連帯は日々強まっていった。

トゥーサンとの質疑応答の模様を少しだけ思い出してみると――

①「東京、第一印象」に出てくる「アンデルレヒト」というのは何ですか？（中国人女性）――これはベルギーのサッカーチームの名前です。心あるサッカーファンは、アンデルレヒトこそはベルギー最高のチームだと信じて疑わな

いんですよ。

②「香港」最後の「真実らしさはもうたくさん」、これはどういう意味なの？（オランダ人女性）――つまりその前の部分まではまるで小説みたいでしょう。空港の待合室で物思いにふけって、『カメラ』の主人公みたいな感じで。でもこの本は小説ではないから、小説風に語るのはここで打ち止めにしようというわけなんだ。いかにも小説風な「真実らしさ」、「本物らしさ」は必要ないよということ。（これに対し複数国の訳者たちから「ちょっとわかりにくい」の声あり。トゥーサン意に介さず。）

③「プラハ」に出てくる「祈禱台」、これは大きな辞典についているイラストで見ると丸々と盛り上がってなどいなくて、むしろなんかぺったりとして固そうな椅子なんだけど？（日本人男性）――でもぼくは教会で、ふかふかの、座る部分が丸く盛り上がったやつを見たことあるんだけどな。（『小学館ロベール仏和大辞典』のイラストを見て）うん、これとは別のイラストをつけとくべきだな。

④「コルシカ岬」でクリスチャンについて「リトアニア人のいとこのような思いやり深さ」とあるんですが、どういう意味ですか？（中国人女性）――ぼくの母方の祖父がリトアニア出身なんですよ。そのあとで出てくる「ランスコロンスキス」がその祖父なんです。リトアニア人というのは独特の親切さを持っている気がして。それでヴェトナムでの歓迎についても「リトアニア的」と形容しているわけなんです。

⑤「チュニジア」に出てくる「コンロッド」って、いったいなんのこと？（チェコ人女性）――車の部品なんだけれども、ぼくもよくわからないんだ。そのわけのわからない名前さえ訳しておいてくれればいいよ。

――といった次第で、とにかくみんな、現在翻訳中の作品について直接その

場で原作者に質問できるという大変な特権をフルに行使しようと、毎日疑問点をためこんでくる。トゥーサンの応答は親切きわまるものだったが、彼ほど人のいい作家でなければ嫌気がさして逃げ出してしまっただろう。

それにしても興味深かったのは、各国の翻訳家たちがみんな一様に穏やかで物静か、押しの強くないタイプばかりで、翻訳家というのはそういう人が多いんだなと妙に納得がいく思いだった。互いの国におけるフランス語関係の出版状況を探り合ったり（日本よりも中国の方が、フランスの新しい作品を今や旺盛に翻訳出版しているらしい）、これまでの仕事について語り合ったりと、立場を共にする者同士の会話は実りあるものだった。お互い翻訳の経験は積んでいながら、話すフランス語はどこかブッキッシュでお国訛りが漂っているのも共感を誘った。

「翻訳家たちが孤独の殻を破るとき」――トゥーサン組のワークショップを取

材した地元「ル・ソワール」紙の記事には、そんなタイトルがつけられていた。確かに翻訳家コレージュは、翻訳家が日ごろの孤独から抜け出し、自分たちは一人ではないのだという事実を肌身で体験する場を与えてくれたのだった。

そしてみんな、二週間の滞在の終わりには無事、翻訳作業を完了してしまっていた。まずオランダ、次いで日本、それからドイツ、中国、チェコで、順次『セルフポートレート』が刊行されていくはずだ。トゥーサンの作品もまた、各国の言葉に宿って世界を旅するのである。

☆

という次第で、訳者にとって本書の翻訳は他のトゥーサンの本以上に思い出に残る仕事となった。コレージュでの滞在というまたとない機会を与えてくれ

たフランソワーズ・ヴュイルマール、辛抱づよく質問に答えてくれたトゥーサン、そして同じテクストを前に共に頭をひねった仲間たちに深く感謝したい。好条件のもとで進めることのできた、しかもごく薄い翻訳ではあるが、思わぬミスや勘違いが残っているかもしれない。それがひとえに訳者の責任であることは言うまでもない。

最後に、編集の実務万端を担当してくださった集英社翻訳書編集部の岩本暢人さん、いつもながらトゥーサンの世界を的確にとらえたイラストを描いてくださった杉田比呂美さんに心から御礼を申し上げます。

二〇〇〇年十一月

野崎歓

追記　扉の写真はトゥーサン自身がかつて京都に滞在した折に撮影した文字どおりのセルフポートレートである。小説、映画に続き写真による表現にも意欲を示すトゥーサンは今年四月ブリュッセル、そして十一月には大阪および京都で写真展を開催した。写真家トゥーサンの仕事が注目を集めるようになる日も近いだろう。

なお訳者あとがきの後半部分は、雑誌「eとらんす」二〇〇〇年十二月号に掲載された拙稿「孤独の殻を破る場——ベルギー『翻訳家の家』滞在記」と一部重複することをお断りしておく。